

エジンバラ植物園で Corner 博士の標本を見てきました

森林総合研究所 根田 仁

平成 20 年 6 月後半、私はイギリスのエジンバラ植物園を訪れ、念願の Corner 博士の標本を観察することができました。Edred John Henry Corner (1906 - 1996) は、イギリスの偉大な植物学者 & 菌学者で、日本がスポンサーの「国際生物学賞」の第 1 回受賞者 (1985 年) です。多くの著作で有名ですが、「植物の起源と進化」(八坂書房) と「思い出の昭南博物館」(中公新書) の 2 冊は、是非多くの方に読んでいただきたい本です。Corner 先生は、1926~1946 年の間、シンガポールのラッフルズ植物園で植物・菌類の研究を行い、その後ケンブリッジ大学の教授を務めました。シンガポールは、太平洋戦争中、日本に占領されました。その間、日本からやってきた研究者達との交流のドラマは実に劇的で、その思い出話を読むたび、「非常時に研究者は何をすべきか？」を考えさせられます。Corner 先生には、20 年ほど前にお会いしたことがあります。と言っても、学会の集会でちょこっとご挨拶しただけでしたが。その後、トキイロヒラタケ (*Pleurotus djamor*) の標本をお借りし、数回お手紙の交換をしました。今、思うと、イギリスを訪れ、先生にお会いしておくべきでした。

Corner 先生の著作では、綿密な記載と精密な図を備えている種から、簡単な記載で図を欠く種までありますが、文献から種のイメージをつかむことは難しいことが少なくありません。生の子実体や写真を見ることができれば良いのですが、標本からも重要な特徴をつかむことができます。と言うより、タイプ標本(基準標本)こそが種を表すものですから、

標本を観察することは極めて重要です。標本は、手紙等で依頼すると、海外へも貸し出してくださることもありますが、大量の標本を送ってもらうことはできません。その点、標本館を訪れると、一挙にたくさんの標本を効率的に観察することになります。こう書くと、いかにも標本観察のために各国を訪問しまくっているかのように見えますが、横着で出不精の私が外国の標本館を訪れることは殆どありません。1991 年にアメリカのミシガン大学とハーバード大学の標本館を訪れた時以来です。

Watling 先生の配慮により Corner 標本と私信の観察・閲覧

今回、お世話になったのは、Roy Watling 先生。この先生は、10 年前にエジンバラ植物園を退職されましたが、今でも、時々、植物園の研究室に来られて、研究や後進の研究者の指導をされています。Corner 先生の標本は、ケンブリッジ大学に収められているものもありますが、大半は Watling 先生に託されて、現在エジンバラ植物園で保管されています。実際には、分類群別の段ボール箱に入れられ、標本室の一角の棚 (「E. J. H. Corner」コーナー) にあります。標本の中には整理されて、メインの標本棚に移されたものもあり、探すのに手間取ることもありました。かなり前に、服部力さんが多孔菌の標本観察をして、その結果を *Mycoscience* に発表されました。その時、Watling 先生は服部さんに「ハラタケ類は、日本から誰か見に来ないのか？」と言われたとか。ハラタケ類が専門の Watling 先生

が調べれば良いのではと思いますが、後輩達に仕事を残しておいてくれたのでしょう。

エジンバラに着いた翌朝、標本館を訪ねると、Watling 先生が待ちかまえていて、館内を案内して下さいました。窓際のテーブルには、私が観察を希望していた菌の標本の入った段ボール紙の箱が置かれています。標本とは別に、観察のメモ、手紙の束もありました。なるほどお。Corner 先生は、こうやって、研究を進めてきたのか…。メモは、ノートではなく、バラバラの紙に記していくのが流儀だったようです。また、メモの多くは別の用途の紙の裏側に書かれています。いかにも耐乏の時代をくぐってきた研究者を思わせます。手紙の束から、世界中の菌学者と情報のやりとりをしていたことがわかります。以前、私が Corner 先生に差し上げた未熟なことを書いた手紙も残されていました。恥ずかしい…！菌学者達からの手紙は、なかなか興味深いです。第一線の研究者と意見を交わしながら、研究を進めていったのですね。また、旧ソ連だったエストニアの研究者からの手紙には、「アメリカの某大学に標本貸出依頼の手紙を出したけど、貸してくれるどころか、返事もくれない。これは政治的理由なのか…？」とか、某ユダヤ系の有名菌学者を批判する手紙とか、読んでいて飽きません。しかし、そういう研究者間のつきあいと縁遠い私は、少し絶望感を味わいました。現在はインターネットで情報交換ができるので、ますます緊密にやりとりをしている筈です。英語の苦手な人は、研究の最前線についていけないから、厳しいです。

Corner の標本は、乾燥と液漬の両方があります。八丈島で採集された *Mycena luxcoeli* のタイプ標本は液漬になっていました。こういう肉質で小さい菌は、乾燥させると縮んで、わからなくなってしまう。しかし、液漬なら形が良く残っています。私も液漬標本の良い点を見直すべきかもしれません。乾燥標

本は、乾いて、縮んで、変色していますが、それでも元の形態的特徴の推察を試みます。必要なら顕微鏡で微細なところを観察します。しかし、Corner 先生は顕微鏡観察をよくされていますので、肉眼的特徴の確認で十分かもしれません。じっくり顕微鏡観察をしていると、多くの標本を見ることができないので、標本を肉眼で眺め、写真を撮影することに終始しました。今回はヒラタケ属やヒラタケ型の子実体の菌を主に 200 点ほど調べました。これで、このグループの仕事を進めることができるでしょう。良かった…。

先生宅でのパーティーで知り合った研究者との談笑とエジンバラ郊外でのきのこ採集

標本館での標本観察以外にも、Watling 先生に、あちこち連れていってもらいました。まず、最初は先生のお宅に呼ばれました。どこの国でも自宅に客を呼ぶのが一番の接待ですね。子供さん達が既に独立されているのもあるでしょうが、家の中はこざっぱり片付いて、羨ましいというか、見習わないと…。奥様の手料理をいただき、紅茶やワインを飲みました。いろいろ日本のことでも話せば良かったのですが、一緒に呼ばれたフランスやタイの研究者の方が、話を盛り上げてくれたので、内気な私はおとなしくしていました。フランスの研究者は気さくな方で、誰かと思ったら、アフリカのベニタケ属の研究で有名な B. Buyck 先生でした。もっと年のいった人かと思ったら、私と同世代でした。タイの大学の先生とは、数日おきに一緒にパブに行っておビールを飲みました。共同研究のプロジェクトを企画して、タイを訪問して調査することを約束させられました。実現するのかなあ？

エジンバラから 10 数 km 離れた所にある植物園の分園へも行きました。大きな木がたくさん生えています。おみやげ屋で樹木（高木のみ）の図鑑を買い、木の名前も覚えめました。でも、こちらは簡単！だって、種類が少ない

のだもの。スコットランドにマツ属は1種、ナラ属は2種しか分布していません。植物園内は外国の樹種も植えられていますが、これらは名札がついています。きのこも種類が少なく、しかも、たいていは名前がついているのだらうなあ。ヨーロッパは分類学の本家本元だから、日本のように「とりあえず、欧州産と同種と認め、同じ学名をあてました。」というわけではなく、本当にその学名の種です。こういう場所で、きのこの分類の勉強をすると、ずっと、まっとうな知識が頭に入るのでしょう。

別の日は郊外へ出かけて、きのこ採集でした。デンマーク出身の研究者の車に乗り合わせて行きました。車内で世間話や家族の話をします。デンマーク人がタイ人に質問。「家族はいるの？」 タイ：「私は独身ですよ。タイでは、お嫁さんをもらう際の結納金が高いから、現在貯金中。あと数年貯めないと。」 デ：「結婚するのに金がかかるのは、世界中同じだな。昔のバイキングなら、スコットランドに来て、女をさらってくれば良かったけど。」 日：「で、あなたはバイキングの末裔？」 デ：「俺の先祖は、内陸の農民だよ…」とか何とか、話をするわけです。採集地は小川ぞいの低木の茂る所で、関東地方の谷津田を思わせました。エジンバラの「きのこ会」のメンバーも集まっていて、ルーペを首からぶらさげ、ガサゴソと探していました。私は、あまり見つけられなかったのですが、他の人達は、色々採集していました。

夏至の頃のエジンバラと植物園

標本観察の間には、標本館のあるエジンバラ植物園の中を歩き回りました。広くて、たくさんの植物が植えられていて、素晴らしいところです。ヒマラヤの高山植物を植えた一角があったり、色々な種類のシャクナゲが集められて花が咲いていました。1854年にできた巨大なヴィクトリア調の温室もあり、この

植物園の顔にもなっています。日本にもこのような立派な植物園があると良いのだけどなあ…。規模・施設・活動内容で、及びませんねえ…。市民の憩いの場でもあるようで、たくさんの人がやってきて、散策していました。こういう外国の植物園に来て、日本の植物が植えられているのを見ると、同郷の友人に会ったようで、嬉しいものです。ケヤキやイロハモミジ、カツラ、コウヤマキなどを目にしました。ケヤキは、日本では箒を逆さにしたように天に向かって枝をまっすぐに広げたような樹形になりますが、こちらでは、ぽっこり丸い樹形になっています。別にそのように仕立てたようにも見えないので、気候の影響なのでしょうか？面白いものです。

今回は夏至の頃に訪れたので、昼の時間が長かったです。しかもサマータイムで1時間早くしているので、緯度が高いこともあり、午後10時でも明るいのです。朝は4時には明るくなっていますので、時差ボケもあり、早起してしまいます。その分、早く眠くなり、まだ明るいのに寝入っていました。そして、エジンバラは寒かった。最低気温は10℃を下回り、最高気温も20℃以下です。ロンドンよりも約5℃低いらしい。日本のつくばと比べると10℃は低そうです。着いた日に、もっと暖かい服を持ってくれば良かったと反省しました。

B & Bに宿泊そして物価は安くなかった

宿は、B & B (ベッド+ブレック・ファースト)の安宿。それでも30ポンド(約6千円)。これでも安い方です。部屋からの眺めは良いのですが、天井の低い屋根裏部屋です。ま、しかたありません。朝食は、Full Scotch Breakfast で、卵焼き、ソーセージ、ベーコン、マッシュポテト、ブラックプディン、マッシュルーム、トマトが大きな皿に並び、ボリュームがあります。さらに、トースト、ヨーグルト、フルーツを食べるので、1日の栄

養分を朝食だけで摂ってしまうくらい。ちなみに、昼食は植物園の職員食堂でシンプルな料理（マッシュポテトと炒め物）、夕食はサンドイッチで済ませます。

物価は高いです。消費税が 17.5%だからかな？日本での価格の 1.5～2 倍くらいはします。ポケットマネーで来ている身には辛いです。コンビニで、サンドイッチ 2 個パックが 300～500 円、マクドナルドのハンバーガーも倍の値段です。流通の各段階で、税金がかかるから、トータルでは級数的に価格が上がってしまうのでしょう。

スコットランドの伝統も堪能

エジンバラの中心街は、古い石造りの凝った建物ばかりです。ギリシャやローマ風の柱が並んでいたり、聖人・女神の像が屋根の上に乗っていたりします。こういう所にお金と手間をかけるのが文化というものなのでしょう。日本でも、戦前に作った建物は、外側の装飾が立派だけど、最近では機能本位で、四角いだけで装飾もなく、味気ないです。そこで暮らす人達にも影響を与えるのではないかな？建物の飾りと教養の多寡は、きっと関係があると思います。

スコットランドと言うと、キルト！男物のタータンチェックのブリーツ・スカートのような服です。観光関係の人はもちろん、普通の男の人でもキルトをはいて街を歩いています。公式の席とか、「俺はスコットランド人だ」と主張したい時に着用するようです。洋服屋さんのショーウィンドウには、ジャケット+キルトのマネキンが置いてあります。オーダー・メイドだと、上下セットで数万円はします。日本でも背広を誂えるとそのくらいするから、妥当な価格なのでしょう。おみやげに買って帰ろうと思っていましたが、気軽に買える代物ではありません。さんざん迷いましたが、結局、買ってしまいました。でも、お土産屋で売られているアクリル生地 of 安物で

す。たぶん浅草で売っている「kimono」みたいな物なのだろうなあ。服についているタグには、“SCOTTISH EXPERIENCE”の文字が…。いかにも、お土産っぽいですね（でも、約 4 千円と値段は高め）。男物と女物の違いを確認したら、布を巻いた外側の端が右足側になるのが男物、左足側になるのが女物。他に大きな違いはなさそうですが、男物の方は生地が丈夫です。宿の部屋で、赤いタータンチェックのキルトをはいて、缶ビールを飲みながらくつろぎ、まだまだ明るい外の風景（百年以上は建っていそうな家並み）を見ていると、日本での日々を忘れてしまいそうでした。

来て良かったと思うでももっと早ければ…

というわけで、いつの間にか、楽しくも充実した 2 週間は終了しました。こうやって仕事と家庭を放り出して、出かけられるだけでも幸せです。研究室で標本を見ていて、「こういう仕事は、20 年前に済ませておくべきことなのだなあ…」と、しみじみ思いました。欧米では当たり前のことでも、日本人の研究者でこういうことをした人はあまりいません。それだけ、日本でのこの分野の仕事は遅れているのです。世界の一流の研究レベルには、まだまだ遠いことを痛感。でも、それとは別に、新しい研究者の知り合いを作ることができました。これは今後の私の研究活動に大いにプラスになることでしょう。来て良かった…。しかし、もっと早く来れば良かった…。自分の殻を破って外に出ていくことの重要性をあらためて感じました。今回、お世話になった Roy Watling 先生、エジンバラ植物園の関係者の皆さん、そして今回の標本観察旅行を勧めて下さった服部力さんに深く感謝して、この拙文を終わりにします。